『封神演義』に登場する神仙について

二階堂　善　弘

On Some Immortals in *Fengshen Yanyi*

NIKAIDO Yoshihiro

This report examines the origin of the immortals that appeared in *Fengshen Yanyi*. The authors of *Fengshen Yanyi* did not understand Taoist and Buddhist scriptures, so they compiled the book based on folk literary works such as popular novels and drama scripts. Immortals such as Taiyi Zhenren and Guangchengzi often appear in the drama.

Keywords: Immortals, Taoism, Drama, Popular Novel

キーワード：神仙、道教、戯曲、通俗小説

前　言

筆者は以前、衛聚賢氏の『封神榜故事探源』に基づいて『神仙通鑑』と『封神演義』の関係について論じた[1)]。本論では引き続き、『封神榜故事探源』などを参照しながら、他の通俗文学の資料にも登場する神仙との関連を考えてみたい[2)]。

1．太乙真人

『封神演義』に登場する神仙である太乙真人（たいいつしんじん）については、いまでは哪吒（なた）の師であることのほうが知られているかもしれない。中華圏の廟でも、哪吒太子との組み合わせを見ることが多い。

1）筆者「『神仙通鑑』と『封神演義』の関係について」（『東アジア文化交渉研究』関西大学東アジア文化研究科第13号2020年）325-336頁。なお、衛聚賢『封神榜故事探源』（説文社1960年）を用いる。本論では前論と同様に『封神演義』の底本としては、『新整理本封神演義』（江蘇古籍出版社1991年）を使用する。なお参考として、筆者監訳『全訳封神演義』（全４巻・山下一夫・中塚亮・二ノ宮聡共訳・勉誠出版2017-2018年）を用いる。さらに、筆者『封神演義の世界』（大修館書店1998年）も適宜参照する。

2）また山下一夫「『封神演義』作者による神仙像の改変について：長耳定光仙と燃灯道人を中心に」（慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』72巻1997年）39-61頁参照。さらに雑劇と道教の関連については、廖敏『元代道教戯劇研究』（巴蜀書社2013年）、李艶『明清道教与戯劇研究』（巴蜀書社2006年）なども参照のこと。

澎湖島観音亭の太乙真人と哪吒太子

太乙真人などの主要な神仙は、いま流布する『封神演義』関連の物語では、一般的に「崑崙十二仙」「闡教十二金仙」とも称される。『封神演義』のなかでは「崑崙山玉虚宮掌闡教道法元始天尊」の「門下十二弟子」と書かれている。

太乙真人は、『封神演義』第十一回登場時には、「乾元山金光洞太乙真人」とするのみで、詳しい説明はない。衛氏の『封神榜故事探源』でも『三教搜神大全』での例が示されるくらいで、事績などは不明である[3)]。そのために、太一神、太乙救苦天尊などの別の神格との関連がむしろ考えられてきた。

ただ、いくつかの雑劇では太乙真人は、ほぼそのままの名称で登場している。まず「慶千秋金母賀延年」雑劇を見てみたい[4)]。これは慶賀劇のひとつで、瑤池金母を神仙たちが慶賀するというものである[5)]。一応、漢の時代が舞台となっている。そして主となる太乙真人は、次のように述べる。

> 跨鳳乘鸞謁上眞、仙家洞府永長春。蟠桃宴罷歸來晚、誰識逍遙物外人。吾乃太乙眞人是也。此一位乃冲虛眞人。吾自天地肇判、陰陽定位之初、清氣騰而為陽天、濁氣降而為陰地、為陽天者五大相傳、五天定位。上施日月森羅懸象、為陰地者五行相乘、五氣凝結、負載江海山林屋宇。故曰、天陽地陰。吾乃生於混沌之先、今因人世之中。大漢孝文在位。仁慈寛厚、孝敬聖母、以德化民、有堯舜之道。今遇聖母千秋已近。吾遣直符使者、問於本境城隍、然後會同金母元君、至日祝賀、有何不可。仙童

3）前掲衛聚賢『封神榜故事探源』133頁。

4）『孤本元明雑劇』第十冊所収。なお『孤本元明雑劇』は、台湾商務印書館発行の1977年のものを用いた。またデータについては、中国都市芸能研究会（https://www.chengyan.wagang.jp/）「中国古典戯曲資料庫」のものを用いている。

5）神仙が縁のある人物を解脱や得度させる劇を「度脱劇」とし、妖怪などを退治する劇を「駆邪劇」とする。この他、ただ神仙が現れて祝賀を行う劇を「慶賀劇」とする。より詳しくは、筆者「『元曲選』中の度脱と駆邪について」（『論叢アジアの文化と思想』第２号1993年）32-55頁などを参照のこと。

那裡、與吾喚將直符使者來者。

ここで太乙真人は、冲虚真人とともに現れる。冲虚真人とは、一般的な解釈の通りであれば列子、すなわち『列子』を著した列禦寇のことである。この劇は特に事件などもなく、慶賀を行ってそれで終わるものである。

なお列禦寇は雑劇においては仙人として扱われており、「竹葉舟」雑劇では張子房（張良）、葛仙翁とともに登場する。

このほかに、同じ太乙真人が登場すると思われるものに「太乙仙夜断桃符記」がある[6]。こちらは駆邪劇にあたる。すなわち妖怪退治ものである。洛陽で桃符が妖怪となり、その化けた女子が府尹の子をたぶらかしたのを、太乙仙が捕まえるというものである。

太乙仙が登場すると、次のように述べる。

瑤池宴上聚羣仙、親獻蟠桃玉女傳。閑看蓬萊方外景、不知塵世幾千年。貧道乃太乙仙是也。今還信州去、路打洛陽府過、府尹閻有信、與貧道有一面之交。就探望府尹相公一遭、來到這門首。

普通の道士のように見えるが、実は数千年を経ている仙人である。このセリフから見るに、おそらく太乙仙とは、太乙真人の別称であると考えられる。太乙仙が法術を使う場面は、他の駆邪劇とそう変わらないものであるが、非常に興味深い描写となっている。

請上界元始天尊、三清四帝、五師六神、侍香金童、傳言玉女、南斗六星、北斗七星、東斗五星、西斗四星、十二宮辰、二十八宿星君、雷公電母、風伯雨師、雷霆大將、主行利兵、鄧辛張陶四大元帥、龐劉苟畢四大元帥、神霄雷符馬元帥、金輪如意趙元帥、神霄無拘溫元帥、馘魔上將關元帥、本壇攝令城隍土地等神。叩齒焚香、恭聞聖力非遙、遠望流光下注、先煩普濟、願立慈悲、劍斬鬼魔之首。月照長空之體、謹請三天烈力五岳神兵、衝符佩劍在雲間、跨鶴乘鸞於月下。排列道眾、唱演法音。今為府尹閻義之子閻英、染病服藥雖瘳、香燭花果列壇前。發遣神兵於目下、又請天仙兵馬、地仙元統軍、江湖河海兵馬九江各一萬旗頭。來赴法壇、簇壇三陣、開天關、閉地戶、留人門、塞鬼路、穿鬼心、破鬼肚。吾奉太上老君急急如律令。

温元帥、関元帥、馬元帥、趙元帥をはじめとして、鄧・辛・張・陶に龐・劉・苟・畢までの雷部の多くの元帥神に命ずる[7]。ただ、このあと実際に太乙仙の前に出てきて妖怪を退治する役割を担うのは、直符使者と鍾馗である。

このように、雑劇では太乙真人は神通広大な仙人として登場し、活躍する。『封神演義』に登場する太乙真人の形象も、これらの雑劇からそのまま移してきたものであると考えられる。すなわち、明代の民

6）『孤本元明雑劇』第十冊所収、明代の作、作者不明。

7）元帥神については、筆者『道教・民間信仰における元帥神の変容』（関西大学出版部2006年）を参照のこと。

間において、太乙真人はよく知られた仙人であったのである。

また太乙真人は、『封神演義』第十三回「太乙真人収石磯」で石磯娘娘と激しく戦うが、その形象にはこれら雑劇の影響があるものと推察される。ただ雑劇などでは、仙人本人はあまり戦わず、配下の元帥神などに命じて戦わせることが多いが、『封神演義』ではそうでもない。おそらく、これはむしろ八仙などの影響を受けているものと考える。

2．広成子・赤精子

広成子がいくつかの雑劇で登場することについては、先の論でも少し指摘した[8]。すなわち「広成子祝賀斉天寿」「感天地群仙朝聖」などの雑劇である[9]。

「広成子祝賀斉天寿」も慶賀劇である。そこでは、広成子が登場して次のように述べている。

> 貧道廣成子是也。祖居西瞿國人氏、幼而敏悟、性好山林、棄俗出家、在此崆峒山煙霞洞居住。貧道善曉禽言獸語、毎日則是遊山翫水、好是幽哉快活也呵。

崆峒山は、もともと広成子と深い関係を有する山である。『神仙伝』でもそのように記される。しかし、『封神演義』では霊宝大法師が崆峒山の主とされ、広成子には九仙山が当てられている。このあたりは『封神演義』のほうに作為が目立つ。

この雑劇では、広成子の弟子として無影道人、九霊大仙、玄真大仙などの名が見える。またこの雑劇では、東嶽大帝が他の五嶽の神を引きつれて現れる。

この雑劇の時代設定は黄帝の時であり、風后などの人物も登場するが、すでに神々の位階は定められていることになっている。わざわざ殷周のときに「封神」する必要はないのであるが、これについては『封神演義』の作者たちは意図的に無視しているのであろう。

「感天地群仙朝聖」も慶賀劇である。登場するのは、長生大帝と、広成子や赤松子などである。広成子はこの劇ではこう述べる。

> 上清仙客鬢如絲、自剪青霞作道衣、幾見桑田滄海變、不愁窗外日光飛。貧道乃廣成子是也。此一位乃是赤松子。貧道居崆峒之山、石室之中、修其大道。有軒轅聖人、親臨貧道所居之處、問其至道。貧道答曰、至道之精、杳杳冥冥、至道之極、昏昏默默、無視無聽、抱神以靜、形將自正、必靜必清、毋勞爾形、毋搖爾精、可保長生。得吾道者、上拜三清、失吾道者、未得超昇。與日月齊光、與天地同常、我獨存焉。俺二仙正在三島閑遊、有長生大帝呼喚、不知有甚事也。

この雑劇には、白玉蟾、王重陽、劉処玄なども登場する。すなわち全真教が発展したあとの話であり、

8）前掲筆者「『神仙通鑑』と『封神演義』の関係について」333頁。

9）ともに『孤本元明雑劇』第十冊所収、明代の作、作者不明。

また劇中で「大明朝一統」と言及されているので、明代という設定である。

広成子は『封神演義』では出番が多い神仙である。特に番天印で火霊聖母を殺したあと、金霞冠を通天教主のもとに届けに行き、それが誅仙陣に発展するという話で重要な役割をはたしている。

また前にもふれたが、この雑劇で広成子とともに登場するのは赤松子である。赤松子は登場すると次のように述べる。

> 廣成子、自古為仙之人、生而有幸、得遇大道相傳、方得成仙了道、飛昇三界、永住蓬萊、非同容易。長生大帝呼喚、必然有事、須索走一遭去、可早來到也、報復去、道有廣成子、赤松子來了也。

赤松子は神農のころの人物で、雨師であるとされる。神仙や僧侶の伝を記す『仙仏奇蹤』でも、広成子と赤松子の伝は並んでいる[10)]。

『封神演義』で広成子と縁が深いのは赤精子（せきせいし）である。『封神演義』第九回で殷郊と殷洪の兄弟が処刑されそうなところを助けるのはこの両仙であるし、広成子は殷郊を、赤精子は殷洪をそれぞれ弟子にする。第四十五回で十絶陣と対するところでは、赤精子と広成子が組となっている。広成子も赤精子も、もともと老子の化身とされる神仙である。

とはいえ、雑劇において知名度が高いのは圧倒的に赤松子のほうである。『封神演義』の作者たちは、赤松子と赤精子を意図的に混同させている可能性もある。

なお、「李雲卿得悟昇真」雑劇にも広成子は登場している[11)]。そこでは、劉海蟾（りゅうかいせん）や張果老などともに現れる。

3．黄龍真人

『封神演義』の主要な神仙のなかで、損な役割を押しつけられていると思われるのが黄龍真人（こうりゅうしんじん）である。鶴に乗る二仙山麻姑洞の神仙とされる。『封神榜故事探源』には黄龍真人について、ほとんど記載がない。

十絶陣の場面においては、趙公明によって黄龍真人は捕まり、陣の旗の上に吊されてしまう。その後、楊戩（ようせん）の手助けで脱出する。呂岳（りょがく）と対峙した時も、その勢いに抗することができなかった。馬遂と戦った時は金箍（きんこ）をはめられてしまう。正直、気の毒になるほど『封神演義』での黄龍真人の扱いは悪い。

どうもこれには、『封神演義』の作者たちの悪意があるように思われる。以前筆者は、黄龍真人は、実は黄龍禅師（おうりゅうぜんじ）なのではないかと考えたが、ここではそれについて少し述べたい。

黄龍禅師は、呂洞賓（りょどうひん）との関わりが強い僧侶である[12)]。宋代の僧侶黄龍慧南（おうりゅうえなん）がモデルであるとされる。

10）明の洪応明の撰、ここでは江蘇広陵古籍刻印社発行の『仙仏奇蹤』1993年の影印本を使用した。

11）『孤本元明雑劇』第九冊所収、明代の作、作者不明。

12）これについては「白話小説中の僧侶と法術：『警世通言』巻二十八「白娘子永鎮雷峰塔」および『平妖傳』を中心に」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』20号2017年）１-25頁を参照。

『醒世恒言』には「呂洞賓飛剣斬黄龍」という小説があり、また雑劇には「呂純陽点化度黄龍」がある[13)]。

そして、すでに指摘されているように小説「斬黄龍」と雑劇「度黄龍」では、その結末が逆になっている。小説「斬黄龍」では、呂洞賓は黄龍禅師に挑んで斬ろうとするものの失敗し、かえって禅師の弟子となる。雑劇「度黄龍」では、呂洞賓のほうが黄龍禅師を度脱させるということになっている。どうも、書き手が仏教に肩入れするか、道教に肩入れするかで内容が変わってしまうようである。雑劇「度黄龍」で禅師はこう述べている。

> 老僧黄龍禪師是也。前者在此寺中、遇着一仙長、講論了數日、臨去也賺的眾人回頭、雲生足下、騰空而去、空中現一圓光、光中化做一箇仙人、金冠霞帔。落下箇紙帖兒來、上寫着兩首詩、詩中之意、盡包涵着大道、末尾一句道、吾乃唐朝呂洞賓。老僧方知是呂祖降臨、老僧依着呂祖傳授之言、在山中修煉、得通性命雙修之理、金液大丹之道、老僧忽然省悟、不免向山中尋覓祖師引度、走一遭去。

すなわち黄龍禅師が寺にいたところ、突然道士が現れた。その道士と数日議論したが、最後に雲に乗って去った。残された紙を見て、その正体が呂洞賓であることを知った。

『封神演義』では、文殊菩薩は文殊広法天尊と書き換えられ、普賢菩薩は普賢真人とされ、燃灯仏は燃灯道人になる。また観音菩薩は慈航道人となる。阿弥陀仏も接引道人とされ、倶留孫仏が懼留孫となるに至っては、号すらない。ただ傾向としては、仏教系の人物は、ほとんど道教系の称号に置き換えられている。黄龍真人も、黄龍禅師から書き換えられたものではないだろうか。

『封神演義』全体でも、西方教はそれなりの地位を占めているので、仏教を貶めるという意図はないと思われる。ただ、『西遊記』と比べた場合、どうも仏教に対して配慮を欠いているように見える。意図しているかどうかはともかく、道教偏重という姿勢は透けて見える。

このような『封神演義』の傾向から憶測するに、黄龍真人は黄龍禅師から来たもので、さらに意図的に損な役割を押しつけられているのではないかと考える。ただ、呂洞賓と関連する人物であるために、一応は尊重して十二仙のなかに含めたのではないだろうか。

4．道徳真君・玉鼎真人・道行天尊

清虚道徳真君は、来歴のたどりにくい神仙である。道徳天尊であれば老子のことであり、清虚真人といえば王褒のことである。あるいは、根拠なくいくつかの称号を組み合わせた可能性もある。

『封神榜故事探源』で衛氏は、道徳真君は王褒であると断じている[14)]。ただ、『封神演義』の作者たちは道教経典や仏教経典に通暁しているとはとうてい思えず、王褒の事績などを知っていたかどうかについては怪しい。

現在流布する『封神演義』関連の物語では、道徳真君はむしろ黄天化と楊任の師であることが知られ

13）『孤本元明雑劇』第九冊所収、明代の作、作者不明。

14）前掲衛聚賢『封神榜故事探源』135頁。

ているかもしれない。

それでは王褒の名が雑劇などの通俗文学に見えるかというと、これは非常に少ない。もし清虚真人の号から道徳真君が導き出されたのだとしたら、それはむしろ『神仙通鑑』のほうを参照しているものと思われる[15)]。

もっとも、王子登という名の神仙は、後世においてもたびたび言及される者である。子登とは王褒の字であるため、これを同一人物とみなすことも可能である。ただ、単純にそうと断ずるのも難しい。王子登とは女仙であるからである。

やや本旨からはずれるが、ここで少し西王母、すなわち瑤池金母とそれに関連する雑劇について考えてみたい。

慶賀劇において登場の頻度が高いのは、瑤池金母と八仙である。「祝聖寿金母献蟠桃」「降丹墀三聖慶長生」「紫微宮慶賀長春節」「衆天仙慶賀長生会」など、数多くの作品に登場する。もっとも、これらの雑劇に登場する八仙は、現在一般に知られるものと違い、張四郎や徐神翁が入ったりする。「辺洞玄慕道昇仙」雑劇では、瑤池金母は次のように述べる[16)]。

> 瑤天雲散静無譁、萬象森羅瑞氣加。煉就金丹、長不老、始知三界是吾家。梓童乃九靈大妙龜山金母是也。居於閬風玄苑之中、住於紫府瑤臺之內。凡天上天下女子之登仙者、皆是梓童主掌。前者東華教主、傳玉帝勅令、見下方青氣瀰漫、聖君治世。着令鍾離和洞賓下降人間、引度脩道之人、他十分苦行脩持、况有夙縁仙分。鍾離和洞賓傳與他金丹大道、今日功成行滿、當飛昇天府。我着飛仙賜與他鸞鶴仙駕、霞帔金冠、着八仙接引去了。

この雑劇でも、八仙に加わっているのは張四郎である。

多くの雑劇で、瑤池金母に従う女仙は、ほぼ必ず、許飛瓊（きょひけい）と董双成（とうそうせい）の両女仙である。「降丹墀三聖慶長生」では「王母領許飛瓊、董雙成、金童玉女」とあるが、このパターンは他の雑劇でもよく踏襲されている。「衆天仙慶賀長生会」では、許飛瓊と董双成は、それぞれ次のように述べる[17)]。

> 吾乃瑤池境上金母案下、許飛瓊是也。正與董雙成賞翫仙境、有金童來報、説東華帝君呼喚。不知有甚事、須索走一遭去。（略）許飛瓊、想俺身居紫府、長在仙鄉。

この両仙に加えて、よく名が見えるのが王子登である。これは瑤池金母の配下の玉女であるとされる。「祝聖寿金母献蟠桃」にはこうある[18)]。

15）前掲筆者「『神仙通鑑』と『封神演義』の関係について」334頁。
16）『孤本元明雑劇』第九冊所収、明代の作、作者不明。
17）『孤本元明雑劇』第十冊所収、明代の作、作者不明。
18）『孤本元明雑劇』第十冊所収、明代の作、作者不明。

梓童金母是也。自遣衞叔卿、到於人間、察探當今聖人。果然齋戒、修設仙壇、比及我下降、再差玉女王子登、邀請上八洞神仙、與南極星同去下方、祝延聖壽去。金童傳與王子登、若請了時、教梓童知道。特請南極增福壽、共獻蟠桃億萬年。

すなわち、明代の雑劇によく名の見える王子登は、瑤池金母配下の女仙である。清虚真人の王子登とは、名称が一致するだけのことと考えたほうがよさそうである。

玉鼎真人は楊戩の師として知られ、道行天尊は韋護の師として知られている。ともに十二仙に含まれる。道徳真君同様、来歴のたどりにくい神仙である。

雑劇を見ていても、玉鼎真人・道行天尊などは、類する称号の神仙もあまり見かけない。以前に指摘した通り、玉鼎真人の号は、『神仙通鑑』の「玉鼎定意眞君務光」から来ている可能性がある[19]。とはいえ、任意に作為された可能性もある。

道行天尊も作為された可能性の高い呼称である。「道行」といえばまず有名な仏典である『道行般若経』が想起されるくらいで、むしろ仏教の用語に近いかもしれない。弟子が韋護であることから見ても、文殊広法天尊に類した天尊である可能性もある。

『封神演義』第五十回で、黄河陣で十二仙が次々と捕まってしまう場面がある。赤精子と広成子がまず捕まり、それからまとめて文殊や普賢なども陥ってしまうのであるが、そこに不可解な記述がある。「拿清微教主太乙真人」というものである。この「清微教主」が、太乙真人の号であるのか、それとも他の十二仙の誰かであるのかに関しては、意見が分かれている。

現在一般的には、「清微教主太乙真人」と続けて読み、太乙真人の称号であると考えることが主流になっているようである。『封神演義』では他に清微教主の記載が見えないので、どうにも判断に苦しむところである。

では太乙真人に清微教主の号があるかというと、これはなんとも言えない。そもそも清微教主とは、『北遊記』にあるように、南嶽魏夫人の称号であったりする。あるいは清微系に属する他の神であろう。

先に見た雑劇の「太乙仙夜断桃符記」では、太乙仙は雷法を駆使して妖怪を退治するので、これは考え方によっては清微系の神仙と見なすことも可能であろう。ただ、太乙仙自体には、それほど清微系らしき記載はない。

太乙真人以外の神仙だとすると、黄河陣の記載では、清微教主に当たりそうな神仙は道行天尊と玉鼎真人の両仙となる。あるいは、『封神演義』での設定ミスで、全く別の神仙であった可能性もある。これについては、なんとも判断は難しい。ただ、太乙真人の号ではなく、他の神仙に当てたほうがいいと考える。

5．霊宝大法師・度厄真人

霊宝大法師は、『封神演義』の作中ではあまり目立つ存在ではない。十絶陣などではかなり活躍するほ

19）前掲筆者「『神仙通鑑』と『封神演義』の関係について」333頁。

うであるが、弟子が出てこないためか、十二仙のなかでもやや影が薄い。

そのためか、四川成都の青羊宮で祀られる十二仙の像のなかに、霊宝大法師は含まれていない。代わって加わっているのは燃灯道人である。

霊宝大法師について衛聚賢氏は、いくつかの典拠を挙げて、「霊宝大法師は霊宝監斎大法師である」と論じている[20]。霊宝監斎大法師は『無上黄籙大斎立成儀』などの経典に名が見えており、確かに根拠のある神仙である。もっとも、道教信仰で単に「大法師」といった場合は、「玄中大法師」のほうの知名度が高く、通常はこちらを想起するものと考える。玄中大法師は老子の化身であると、『混元聖紀』には記載がある。すると、同じ老子の化身であるとされる広成子や赤精子との類似点はあるかもしれない。

また『封神演義』では、老子の弟子として玄都大法師がある。これと玄中大法師との関連は不明であるが、あるいは同一の神仙であるかもしれない。

ただ、『封神演義』の作者たちは、衛氏が挙げるような道教経典を参照することは少なかったと考えられる。あるいは、もっと通俗的な道教類書を見て、それを適宜参照しながら霊宝大法師の名称を作為したのかもしれない。

霊宝大法師が名を挙げた度厄真人も、実のところ物語中では、それほど目立つ存在ではない。鄭倫と李靖の師であることが語られ、十絶陣のおりに、定風珠を貸し与える役割で登場するくらいである。第四十五回では、大法師の知り合いで「九鼎鉄叉山八宝雲光洞」の仙人であると記される。

この名称も『封神演義』の作者の作為になる可能性が高いが、その根拠については、少し気になるところがある。

「度厄」と「救苦」は道教経典のなかで頻出する表現である。また仏教の経典においても、よく見られる表現で、「度厄如来」という号も説かれる。『宣和画譜』にも、「度厄真君」の称は見えているので、類する神格の存在はあったように思える。

ただ、『封神演義』の作者については、道教経典などを直接参照している可能性は低く、おそらくこれも作為されたものであろう。

「救苦」の称がある神としては、太乙救苦天尊がまず想起される。こちらは、その名称からはむしろ太乙真人との関連が深いと考えられる。ただ、先に見たとおり、太乙真人は雑劇に登場する太乙仙を参照した可能性が高い。とはいえ、救苦天尊も雑劇に登場することもあるので、知名度は高かったと考えられる。

救苦天尊は、仏教の地蔵菩薩の影響を受けて成立した神である。地蔵菩薩は諦聴という獅子に似た動物に乗るが、救苦天尊は九頭の獅子に乗る。人々を地獄の苦しみから救い出すという点で、救苦天尊と地蔵菩薩は似た役割を持っている。

救済の菩薩というと、もうひとつ観音菩薩があるが、こちらは慈航道人として『封神演義』に登場している。『封神演義』の慈航道人は、どう見ても男性の姿で描かれているのであるが、のちに作られた神像などを見ると、観音菩薩の女性化に引きずられて、女仙となっていることがある。

20）前掲衛聚賢『封神榜故事探源』135頁。

北京火神廟の慈航道人

十絶陣のところで、度厄真人の定風珠を使い、董天君の陣を破るのは慈航道人である。あるいは観音菩薩の役割を、慈航と度厄に分担させた可能性もある。そもそも、度厄真人は李靖と鄭倫の師である。李靖はもとをたどれば毘沙門天で、鄭倫はもとをたどれば、日本の仁王に当たる神である。いずれも仏教と関係が深い。

また九鼎山を九華山だと考えれば、度厄真人は地蔵菩薩を反映したものとなる。これについては適した解を持たないが、いずれにせよ仏教側に寄った神仙であるとは考えられる。

なお、『神仙通鑑』洞天福地の第四十二雞籠山のところには「弘仁度厄通明天尊浮丘翁」という記載がある。すなわち度厄天尊となる。

6．南極仙翁

南極仙翁は、『封神演義』の物語でも、かなり登場回数の多い神仙である。

特に姜子牙と申公豹が争う場面では、その場を収拾する役割を受け持っている。元始天尊のもと、封神榜を渡すのも南極仙翁である。打神鞭も同様である。姚天君によって姜子牙の命が危機に瀕したときも、南極仙翁は活躍する。

南極仙翁は、これはよく知られた神仙で、南極老人ともいわれ、七福神の寿老人であるともされる。

「賀升平群仙祝寿」という慶賀劇では「南極大仙」が登場し、次のように述べる[21)]。

21）『孤本元明雑劇』第十冊所収、明代の作、作者不明。

貧道乃上界南極大仙是也。貧道秉太極之眞形、託虚無而為體、替天行法、與道合眞。久居在十二層鬱羅蕭臺、長遊在八極苑閬風院內、妙無上等億劫、無窮道化羣迷、祖宗天地、化一萬方。自金闕玄元太上老君堅化以來、陰陽始判、太極初分。貧道自居蓬島以來、化愚成道、秉性一誠、煉丹砂九轉而成、採黃芽鼎烹白雪。

このあとに八仙が登場する。ただ、その八仙の人員は、鍾離権、李鉄拐、韓湘子、張四郎、張果老、藍采和、曹国舅、呂洞賓である。八仙に含まれていないのに、徐神翁も登場する。

また、「祝聖寿金母献蟠桃」劇にも、南極老人は登場する。ただ、こちらは「南極星」として現れる。

難しいのは、福禄寿の三星と、南極老人との関係である。寿星と南極老人は、同じ神仙とも考えられるからである。

「宝光殿天真祝万寿」雑劇には、福星、禄星、寿星は三名で登場する。また「降丹墀三聖慶長生」では、寿星が登場して次のように述べている。

太極之初普化通、循環道理運無窮、乾坤定位分天地、萬里扶搖九萬重。吾乃南極壽星是也。掌人間造化樞機、管壽籙人間保命。今大明聖母、慈恩毓德、憫恤小民、恭遇千秋聖誕。與其福祿二星、同往下方謁壽。吾在此神霄之境、等待二星、這早晚敢待來也。

この記載から見るに、南極星は福禄寿の三名の一員ということになる。雑劇に関しては、寿星と南極老人を同じものと考えてもよさそうである。

7．その他

元始天尊・太上老君・霊宝天尊の三尊を三清（さんせい）といい、一般に道教ではこれを最高神として扱う。太上老君は、老子の神としての称号である。もっとも、実務を司るのは玉皇大帝で、三清は位こそ高いものの、それほど仙界の政務には携わらない。『西遊記』を見ていても、孫悟空の討伐を命じたり、また逆に斉天大聖の位に就けたりするのは玉皇大帝である。

通俗小説のなかでは、元始天尊や霊宝天尊が前面に出てくることは少ない。ただし太上老君は『西遊記』以外でも登場することが多い。『封神演義』では、元始天尊は重要な役割で登場するが、これはやや例外的なものと考えていた。

しかし、雑劇においては元始天尊の登場は珍しいものではない。「二郎神鎖斉天大聖」雑劇では、冒頭に元始天尊が現れ、次のように述べる[22]。

太極初分道在先、清陽居上以為天、鴻濛之始吾為長、歴代尊崇億萬年。吾神金闕玄元玉清聖境、元始天尊是也。生於天地未分之先、道在太極鴻濛之始、混沌如鷄子、滋萌元氣、混而為一、是太初也。

22）『孤本元明雑劇』第十冊所収、明代の作、作者不明。

自陽清者為天、陰濁者為地、陰陽既判、各有一端。吾乃九天之祖、萬聖之宗、吾今採日月之精華、乾坤之秀氣、在於太極爐中、煉九轉金丹、可差金童看守丹爐、金丹已成、請天上天下三界群眞、赴金丹之會、有何不可。神符寶籙鎮三天、煉就金丹養聖顔、羣眞慶會朝金闕、永保皇圖萬萬年。

この雑劇は、小説『西遊記』において孫悟空が天界で大暴れする場面に該当するが、人物と役割がだいぶ異なっている。元始天尊のあとにはすぐ斉天大聖が登場し、次のように述べる。

廣大神通變化、騰雲駕霧飛霞、三天神鬼盡皆誇、顯耀千般噁咤、不怕天兵神將、被吾活捉活拏、金精烱爍怒增加、三界神祇懼怕。吾神乃齊天大聖是也。我與天地同生、日月並長、神通廣大、變化多般。（略）吾神三人、姊妹五箇、大哥哥通天大聖、吾神乃齊天大聖、姐姐是龜山水母、妹子鐵色獼猴、兄弟是耍耍三郎。姐姐龜山水母、因水淥了泗洲、損害生靈極多、被釋迦如來擒拏住、鎖在碧油罈中、不能翻身。我聽知的太上老君、煉九轉金丹、食之者延年益壽、吾神想來。我搖身一變、化做一箇看藥爐的仙童、扳倒藥爐、先偷去金丹數顆。後去天廚御酒局中、再盜了仙酒數十餘瓶、回到於花果山水簾洞中、大排筵會。

すなわち、元始天尊と太上老君が用意した金丹を、斉天大聖が盗んでいくというものである。ここでは、天尊と老君の区別が曖昧である。

そして斉天大聖は、兄が通天大聖（つうてんたいせい）、弟が耍耍三郎（さささぶろう）で、姉が亀山水母（きざんすいぼ）、妹が鉄色獼猴（てっしょくびこう）であると述べる。またあとで耍耍三郎は自分が「孫行者（そんぎょうじゃ）」であると告げる。多くの雑劇において、斉天大聖には兄弟がいるのが一般的である。小説『西遊記』では孫悟空を石から生まれたと設定したために、兄弟がいないことになってしまった。しかしそれはかなり無理な設定である。

この雑劇には、二郎神と梅山七聖、通天大聖に耍耍三郎、さらに駆邪院主（くじゃいんしゅ）である玄天上帝が登場する。

この雑劇は題材からして『西遊記』との関連が深いと考えられるが、『封神演義』にも大きな影響を与えているのではないかと推察する。

すなわち、この雑劇では元始天尊、玄天上帝、乾天大仙、巨霊神、梅山七聖が討伐する側で、討伐される側が通天大聖、斉天大聖、耍耍三郎である。また登場はしないが亀山聖母などがある。「通天」側は動物系が多く、猿精や石精が登場する。梅山七聖が梅山七怪となり、なぜか討伐される側に回っている。さらに亀山聖母は亀霊聖母の源流と推察される。通天教主の名称も、あるいはここに由来するのではないだろうか。

結　語

『封神演義』の作者たちは、道教経典や仏教経典の知識を欠いている者がほとんどである。おそらくは登場する神仙などにしても、『西遊記』や『神仙通鑑』などの他の通俗小説、また雑劇などから知識を得て、そのうえで『封神演義』に登場させていると考えられる。明代において太乙真人や広成子は、雑劇にしばしば登場する知名度の高い神仙であった。どこまでが『封神演義』の作者たちの創作で、どこま

でが他の通俗文学からの影響なのかについては、判断が難しい面があるが、今後とも様々な資料を検討していきたい。